

学 院 通 信

2017年11月23日発行

第150号

目 次

巻頭言	2
平成29年度校内読書感想文入賞作品	4
部活動報告	20
フィリピン姉妹校交流プログラム	28
卒業生インタビュー	30
Photo Gallery	35

<巻頭言>

私に与えてくださった人を一人も失わない

校長 濱崎 敦

イタリアに留学していた時期がありました。そのせいか、イタリアはとても好きな国の一つです。理由はいくつかありますが、「人間が人間らしく生活しているなあ」という雰囲気は何よりも気に入っています。一方で、今でもあまり受け入れられないことがあります。自己主張がはっきりしている国民性は言うまでもありませんが、時々それが強すぎるのです。例えば、彼らはなかなか謝ろうとしません。一緒にスポーツした時のことでした。「俺にボールを渡せ！」と何度も主張するので、ボールをパスしました。ところが自分が失敗すると、言い訳ばかりします。挙句の果てにはパスをした者を責めます。そんな場面に幾度も出くわすと、うんざりしてくるのです。

ある夜、一人のイタリア人の友人と口論になりました。私は、「イタリア人のそういうところが嫌いだ。僕にはついていけない」と言いました。するとそのイタリア人はこう言ってきました。「『イタリア人』という一つの物差しで括るのはおかしい。そうでない人もいる。お前は日本人が悪いことをしたら、『日本人はみなそうだ』と思われていいのかわ。一人ひとりとは違うんだ」と。誰よりも言い訳ばかりをし、謝らない彼からそんなことを言われたので余計に腹が立ちましたが、後になってよく考えてみると彼の言っていることは正しいと思いました。

近頃、気になる言葉があります。それは「排除」という言葉です。先日の衆議院選挙の時にも話題になっていました。武田徹氏（評論家・専修大学教授）は、排除の例として思い浮かべる二つの出来事を取り上げています。一つは、ハンセン病患者たちへの過去の隔離政策です。ハンセン病患者は、社会から強制的に隔離され、非人道的な扱いを受け続け、1996年の「らい予防法」が廃止されるまで隔離療養所でしか生涯を終えることができませんでした。もう一つは、相模原市の知的障がい者福祉施設に元職員が侵入し、多くの入所者を殺傷した事件です。障がい者は生きている価値がないと勝手に判断され、抹消され、排除されたという残忍な事件でした。

これを踏まえて武田氏は、「近代社会自体が排除によって成り立っていること」をフランスの思想家ミッシェル・フーコーの考えを用いて紹介しています。「合理主義になじまない存在を社会から排除するために閉鎖型の精神病棟を作る。法に抵触する犯罪者を排除して収容する監獄を作る。そして、こうした被排除者を収容する施設に治療や矯正の機能を持たせ、合理主義、法治主義を更に強化する。それが近代というシス

テムなのだ」(「読売新聞」参照)。

こうした指摘には深くうなずかされます。移民問題や貧困の格差など、現代の世界が抱えている問題の背景には、弱者を切り捨て、合理主義に合わない者を排除しようとするミッシェルの説く近代システムが大きくかかわっていると思われてならないからです。そして、歯止めを失った排除の理論によってきわめて危険で暴力的になっていった歴史の数々を、私たちは思い起こさなければなりません。

イエス・キリストの時代は特にそれが酷いものでした。当時の政治・宗教指導者たちは、事細かに決められた律法という枠に入るか入らないかで罪人を選び分け、基準から外れている者を排除していったのです。そのような社会に反してイエスは、誰とも分け隔てなく関わりました。そして、愛に背く時は毅然とした態度で間違いを指摘し、イエスはいのちをかけて闘いました。その結果、当時の政治・宗教指導者たちは彼から離れ、次第に対立し、イエス自身が被排除者として扱われ十字架に付けられてしまったのです。

他方、イエスの周りには貧しい人、悲しんでいる人、虐げられている人など多くの小さい人たちが集まってきました。しかし、イエス自身は、当時の政治・宗教者を決して排除したわけではありません。なぜならイエスは、次のようにはっきりと言っているからです。「私のもとに来る人を、私は決して追い出さない。私が天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、私をお遣わしになった方の御心を行うためである。私をお遣わしになった方の御心とは、私に与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである」(ヨハネ 6 章 37～39 節)と。

人が社会で生きていくためには、合理的に物事を考え、法や基準を整備することが必要です。しかしながら、そこに当てはまらない場合があります。見落としてしまうこともあります。だからこそ学び合い、話し合うのです。互いに忍耐強く対話を重ね、理解し合い、受け入れ合うのです。それは時に苦しい作業かもしれません。それでも理性と知性をもった神の似姿として創造された私たち人間だからこそ、できると信じています。ましてや将来、社会を担っていく子供たちや若者たちのためなら、その苦勞を避けることはできません。決して雑に関わることなく、注意深く見守っていかなくてはならないと思っています。

「私の若者たちに伝えてほしい。天国で皆を、そして、一人ひとりを待っていると」
(臨終のドン・ボスコの言葉)

<平成29年度 校内読書感想文コンクール入賞作品>

高校の部 最優秀賞

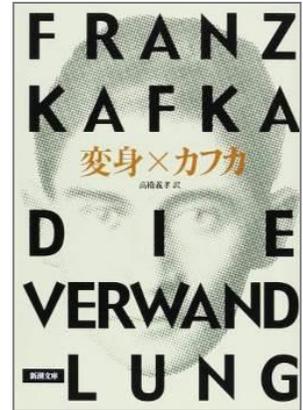
「現実と本質」(カフカ『変身』)

3年D組 成清 麗香

「これはいったいどうしたことだ。」

冷静で客観的でありながらユーモアに富むこの文体を、私は終始快活に楽しむことができずにいた。否、それが許されないような気がしたのかもしれない。

言わずと知れたカフカの問題作『変身』は、主人公のグレーゴル・ザムザがある朝目覚めると「一匹のでかい毒虫」に「変身」してしまったことから始まる。グレーゴルはかつて両親の借金の為に働き、一家の経済的支柱として日夜勤労に励む青年であった。変身後、一時は彼に適応しようと試みた家族は、その姿故に次第に彼を忌み嫌うようになる。グレーゴルは自室に閉じ込められ、人間に戻ることなく、父に投げられたリンゴと飢えが原因で死んでしまうのだ…。



私は一行目から主人公が変身を遂げてしまったことに動揺を覚えつつ、しかし私のそんな動揺をよそに物語は淡々と進む。進んでいく中、終始平常心のまま俯瞰で状況を受け止めるグレーゴルとは対照的に、混沌とした状況に苦悩し、態度を変化させる家族の姿に絶望を覚えた。しかし私は、家族を責めることができない。決して冷酷だとは言いきれない。事態が悪い方向に進んだ時、人間に残るのが慈愛ではなく無慈悲や冷徹さであることをまざまざと見せつけられたことに、私はひそかに絶望したのだ。人間だった頃、主人公を慕っていた妹の「もう潮時だわ。あたし、このけだもののお兄さんの名なんか口にしたくないの。これを振り離さなくちゃだめよ。」という言葉を反芻し、その現実味に震えた。救いは無いのか。無い。そこにはどうしようもなく現実が存在していた。

また更に私が絶望したのは、グレーゴルの死が、家族の苦悩の終結と、新しい希望の始まりにつながったという結末である。主人公が社会的存在でなくなり、そのような「お荷物」が消えた瞬間、家族は各自幸せのあり方を模索するのだ。まるで彼の存在が家族にとって潜在的な不幸の原因となっていたかのようである…。その描写は妙にリアルで、意外性がない。それが恐ろしかった。ここでは彼の父の「さあ、もうい

いだろう。過去は過去さ。」という言葉が胸に刺さる。明るく一步を踏み出す家族の裏に広がる、暗く虚しい現実にはやるせなさを感じずにはいられない。グレーゴルが一体何をしたというのか。そしてその虚しさを助長させたのが、彼が虫に変身するという理不尽な現実には抵抗しようとせず、一貫して家族、特に妹への愛情を持ち続けたことにある。彼の挙動は一切、家族に届くことはなかったが、虫としての動きに染まりながらも、家族に愛情を持ち続け死んでいった彼の本質は、何も変わっていなかったように、私には思えるのである。

家族に対する気持ちは死ぬまで変わらなかったグレーゴルと、一時は可哀想に思いながらも最後には彼を恨み、けだものとして死に追いやる家族。本当の意味で「変身」したのは家族の方ではなかったのか。もしグレーゴルが変身したのが猫や犬といった愛玩動物だったら、結末は変わっていたのかもしれない。毒虫という受け入れ難さに皮肉的なメタファーが含まれると感じるし、だからこそ家族は「変身」したと考える。この不条理は紛れもなく現実であり、その時、家族としての理想は崩れ落ちる。私はここに、人間の本質や、彼の勤労と愛情の無力さを感じ、再び絶望することとなる。

最期に全編を通して現代社会に通ずるものがいくつかあると感じた。例えば認知症を持つ家族を介護する者たちの苦悩である。健常者であった頃を知っているからこそ、その家族がその現実を受け止めることは容易ではない。変わらず同じ愛情をもって接しようとしてももうまくいかないことの方が多い。この時「虫」が象徴するのは「家族としての障害」であり、家族の行動は人間の本質を示す。理不尽で不条理だとしても、自分の損得勘定で存在価値を一瞬のうちに判断してしまうのが人間の悲しき性だ。我々人間は道徳的・人道的行為をどこまで貫き通せるのか。その限界がきた時、仕方がないと妥協してしまうのが、我々人間であると自覚せざるを得ない。本作を読んだ私は、そのような人間の本質から目を背けることはもうできない。

しかし私は、『変身』を恐ろしい夢であってほしいと願わずにはいられないのだ。不条理の逆、それを例えば「無償の愛」と呼ぶならば、この不条理を目の当たりにして私は、「愛」を想像している自分を確認する。グレーゴルの愛は無力だったのかもしれない。しかし確かに存在するものであったと信じたい。彼は死ぬ間際「わりに気分がいいように思われた」と述べる。それが私にとっての唯一の救いである。



高校の部 優秀賞

『当たり前』に感謝して」(大塚 敦子『犬が来る病院』)

3年B組 田沢 歌穂

「どうして神様は二度も私を病気にしたのか？」

七歳半で白血病を発症し、回復後もわずか三ヶ月で再発した。ちいちゃんというひとりの女の子の言葉である。

私が読んだこの本は『犬が来る病院』という題名だが、ドッグセラピーの話だけではなく、四人の子どもたちが懸命に病に立ち向かっていく姿も細かく記されている。ちいちゃんは、その中で最も印象に残った女の子だ。無情にも、彼女は発症から約二年後にこの世を去る。しかし、彼女の生きる姿は人々の心を動かし、家族、そして闘病生活を共にした子どもたちの生き方に大きな影響を与えた。私も、ちいちゃんから多くのことを学び、自分の生き方を見つけることができた一人だ。

実は私は、このちいちゃんにどこか自分を重ねながら読んでいた。なぜなら、私もこの夏病院に通い、苦しい経験をしたからである。白血病のような重い病気ではないが、去年から原因不明の婦人系の病が続き、一時は治ったものの、今度はポリープが見つかった。手術の結果、良性だったため事なきを得たが、回復までの道のりは想像以上に苦痛だった。医師から「突然死していたかもしれない」と告げられた時には、若いからといって「死」を他人事のように考えてはいけないと痛感した。

まだ回復の目処が立たなかったとき、「どうして神様は私を病気にさせたのか」と、ちいちゃんと同じことを考えたことがある。この本の中で、ちいちゃんの質問に牧師はこう答える。「私にも分からない。でも、ちいちゃんのせいじゃないよ。」私はこの言葉に救われた気がした。それまで私は、過去の自分に病気の原因があるはずだと思い込んでいた。自分の生活習慣、食事、ストレスを受けたときの対処法など、あらゆる角度から自分の問題点を見つけ出そうとしていた。しかしいくら考えても思い悩むばかりで、精神的にも滅入ってしまった。そんなとき、この牧師の言葉が私の心の中で消化され、私は考え方を根本的に変えることができた。病気は私のせいじゃないかもしれない。過去を振り返っても、仕方がないことが世の中にはたくさんある。それよりも、今を、どう善く生きるかに目を向けることが大切なのではないか、そう思い



直すことができたのである。

では、より善く生きるとはどういうことか。これは案外難しい。しかしその答えは、ちいちゃんの生き方そのものだと私は思う。ちいちゃんの生き方はとてもシンプルだ。いつも素直で、不平不満を他人にぶつけることはしない。人に対して分け隔てをしない。そして、家族や病院関係者への感謝と気配りを忘れない姿は、特に印象的だった。自分が辛い時に周囲を気遣うなど、簡単にできることではない。しかしそれをたった七歳の彼女が成し得ていたのは、彼女自身が死を悟っていたからなのではないかと私は思った。まだ幼い彼女にとって、死ぬことが怖くないはずがない。きっと多くの恐怖と絶望、そして別れへの悲しみを抱いていたことだろう。しかしそれと同時に、家族や周りの人との残りの時間を大切にしようという気持ちも人一倍あったのではないかと思う。そして、その気持ちこそ、ちいちゃんが周囲に感謝や気配りを忘れなかった一番の理由ではないだろうかと思う。私たちは、健康であるだけにこの気持ちを忘れがちである。生きていること、そして健康であることは決して当たり前ではない。家族や友人がいること、制服を着て学校に通えることは、もっと当たり前ではないのだ。

私たちはきっと、成長すればするほど、そして成功すればするほど、無意識に当たり前だと思えることが増えていく。一旦当たり前だと思えるようになると、無意識のうちに慢心し、自分にとっての「当たり前」を持っていない人を批判したり、疎外したりすることもある。そんな私たちに対して、神様はときどき試練を与えることで、今の生活の有難さに気づかせようとしているのかもしれない。

しかし本来は、私たち自身が「当たり前」は有難いものなのだとすることを忘れないように心がけるべきではないだろうか。極論すれば、生きていることだけで感謝なのである。その気持ちを忘れなければ、様々なことに寛容になれるだろう。そして、誰に対しても分け隔てなく接することができるようになるだろう。人は、誰も相手に何かしらの付加価値を求めたがるが、それは必要だろうかと思は思う。ちいちゃんのように、相手のありのままを受け入れ、その人の心に寄り添える人でありたい。七歳の女の子から様々なことを学んだ。

生きている限り、いつ自分に死がやってくるか分からない。しかしだからこそ、今ある「当たり前」の日々に精一杯感謝して、こんな私でよかったと心から思えるような人生にしていきたい。



高校の部 優秀賞

「足音を追って」(川上 弘美『センセイの鞆』)

2年B組 児玉 乃映

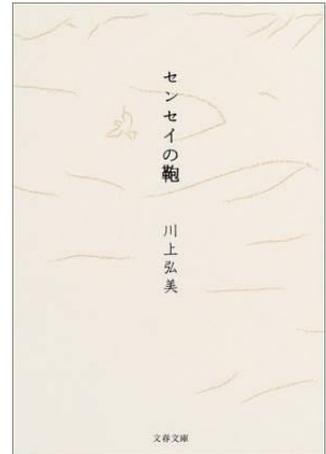
ふと、私の口から吐息が漏れるのを感じた。いったいどんな感情から漏れたのか分からないそれは、部屋の中の空気にとけこんで、いつかはまた私の中に戻るのだろうか。そんなことをぼんやりと考えているうちに、なんだか眠くなってきた。まぶたが重くなるのを感じながら、今日一日を振り返る。そしてひっそり祈るのだ。「幸せな夢が見られますように」と。

一文一文がまるで和紙のようだ。『センセイの鞆』を読んで、まず初めに思ったことだ。文がとても綺麗で丁寧で、その上温かく、愛らしく、時に弾ける。そんな文だった。

一枚一枚人の手で漉かれる和紙のように、大切にされてきたんだなと思った。そんな文章に触れたせいか、私の心は終始穏やかだった。

ツキコさんとセンセイの四季をめぐる物語は、どれも私をうずうずとさせるものばかりだった。二人が交わす些細な会話は、私の心をちくりとさせたし、二人が飲んだり食べたりした物は、私がいつか味わってみたい物になった。高校生の私にはまだ分からないような心情も分かる時が来るのだろうか、遠い夜空を見つめたりもした。読み終えた時は、例えがたい幸福感や喪失感に包まれたものだった。物語の最後にはセンセイの死を連想させるシーンがある。しかし私は、こうして私が読書感想文を書いている間も、二人がどこかでひっそりと肩を並べてお酒を飲んでいるのではないか、とってしまうのだ。そのうち私が大人になったら、二人を探しに街にでようか、と思った。

物語の中に電池の話があった。そこに「モーターを動かすほどの力はないが、ほんの少し生きている」というセンセイの言葉がある。私は、この言葉はまるでセンセイ自身のことを言っているようだな、と思った。だとするときっとセンセイにとって、ツキコさんと過ごした時間は陽だまりのように暖かいものだったのだろう。もう誰にも使われることのない切れかけの電池を、ツキコさんは必要とし、大切に扱ったのだから。センセイはツキコさんと過ごした時間に何を感じていたのだろうか。思えばこの物語には、センセイの心情は描かれていない。そんなセンセイの心情を思い描いて



いるうちに、私の心の中にはもう一冊の「センセイの鞆」が生まれていた。誰にも教えない、私だけの「センセイの鞆」が。

「正式には松本春綱先生であるが、センセイ、とわたしは呼ぶ。『先生』でもなく、『せんせい』でもなく、カタカナで『センセイ』だ。」とあるように、ツキコさんが彼を「センセイ」と呼ぶのはなぜだろうか。わざわざカタカナで、とあるのだから、きっと理由があるのだろう。その理由は分からないが、この「センセイ」という呼び方こそがこの物語に彩りを持たせていると私は思った。どこか無色感のあるこの呼び方は、物語と共に変化する。時に形式的な、堅苦しいイメージを持たせ、時に安心感や繊細さ、あるいは静やかに燃える恋心や大人の色気を身にまとう。「センセイ」とぼつりつつぶやくと、なぜだかとても満たされた気持ちになった。

センセイの言葉はいつも丁寧で綺麗だった。それは私の心の中に一つずつ積もって、私に何かを教えてくれるようだった。センセイの言葉ひとつで、私は幸せな気持ちになれたし、この幸せを誰かに分けてあげたいと思った。私もいつか、センセイのような言葉のつかえる人になりたいなと思った。

「センセイ」と過ごした時間は、とても愛おしくて大切な私の宝物になった。本に耳をかたむけると、二人の足音が聞こえるようだった。ツキコさんとセンセイの物語は、きっとまだどこかで続いている。あの行きつけの飲み屋でお酒を飲みながら、二人は何を思い、どんな会話を交わすのだろう。二人の足音を追って、今日も私は眠りにつく。お祈りは必要ないだろう。なんだか今日は、幸せな夢を見られる気がする。



ねばろ一会にて（4月21日）

高校の部 優秀賞

「本をいつも握って歩いた、考えた」(村上 慧『家をせおって歩いた』)

3年C組 高見 空良

今年の夏、僕は将来の進路について考えていた。自分の得意な「美術」に進むべきか、経済的な見通しが立ちそうな「建築」に進むべきか。いくら考えても結論は出ない。受検指導をしてくださる絵画教室の先生に相談に行った。「美術と建築は、入り口では明快な区別があるけど、それほどかたく考えなくていい。現実はずっと美術と建築を行ったり来たりする。振れ幅が圧倒的に広いのがアート、だから面白い。そういえば、もともと建築をやっていたけど、今は美術家という人が、この前家に来たよ。自分で作った発泡スチロール製の家を背負って、全国中を歩く途中に寄ったんだ。彼は美術と建築のボーダーレスな人だった」と先生。



その人こそこの本の著者、村上慧さんだ。まさか本が出版されるなんて。新聞や雑誌の書評を見かけるたび、他人ごとではない気がしてすぐに本を購入した。村上さんは2014年4月、香川県の自宅を離れ、発泡スチロールの家に住み始めた。「移住を生活する」、つまり漂泊のスタートだ。それ以降の一年間の日記をまとめた本。村上さんが歩いて感じた社会、生き方、出会う人間たちの記録。歩かないと見えてこない境地、自然と社会。村上さんが一步一步大地を踏みしめるたび、そのリズムが再現されるかのように、思索が僕を揺さぶる。

村上さんはなぜ、こんなことをやったのか？行く先々で聞かれた質問だそうだ。「自分探しの旅」でも「青春の記録」でも「将来のための糧」でもないという。村上さんは目的を明言しない。僕は社会への一つの抵抗ではないかと思った。抗議とか反抗よりももっと静かな、たった一人の抵抗。安定や貯蓄、定住を当たり前のものとし、見えない競争に駆り立てられ、定められたダンスを完璧に踊ることを求める社会や職場。私たちはいつのまにか、大量生産、大量消費のシステムに、もやもやと組み込まれてしまっている。

村上さんはこの「閉じ込められた生活」からの脱出を試みたのだ。でも、彼は「そうだ、その通り」とはきつと言わない。何故なら、「どれだけ良いことを言ったとしても、それでなにかを言った気になっちゃいけない」「答えを簡単に出してはいけない。

この文章を信じてもいいけない」とあっけらかんと言うのだから。

そのときの結論は単なる経過でしかないこと。大事なものであればあるほど、安易に答えは出ないことを考え続けろということ。しかも、「あらゆることは他のあらゆることと関係していて、自分もそのまっただなかにいる」と村上さんは続ける。社会のシステムに不満や文句を言い連ねたところで、それは自分に返ってくるだけ。だから「閉じ込められた生活」から静かに脱出するほかなかったのだろうと思う。

道中には強烈な出会いが待ち受けていた。村上さんが移住生活を始めるきっかけになった東日本大震災の被災地では、陸前高田市の佐藤さんと会う。周りに何も無い中、佐藤さんだけが瓦礫を使い、津波で流された店の基礎の上に自力でプレハブのお店を立て直していた。屋外のビニールハウスはアルミ缶のふたを金具代わりにして作られていた。「切実さの塊みたいなビニールハウス」に見たとてつもないサバイバル精神。

また、陸前高田から大船渡を経た越喜来では、瓦礫や廃物を使って津波資料館と遊具を兼ねた建物を作ったワイチさんを訪ねる。子どもたちと町の人たちのために、休みの日を費やして作ったワイチさん。村上さんは「落ち込む暇があったら、無力だなんて嘆く暇があったら、山積みの瓦礫を使って自分の空間を立ち上げろ」と強い口調で感動を記していた。被災地で生き続ける男たちに触発されて得た生きることの希望。人との偶然の出会いが次の出会いを生み、村上さんは大きな希望を自分の目と身体で確かめたのかと感慨深く読んだ場面だった。

村上さんは進路で悩む私にたくさんのことを教えてくれた。自分に率直であれ、正直であれ、誠実であれ、そしてその強さを持て。悩んで立ち止まっても仕方ない。歩け、歩け。自分の足で前へ、前へ。そうすれば次の希望が待っている。テレビや新聞、インターネットに踊らされる情報ではなく、自分でつかんだ実感と言葉だけが骨肉になる。自信になるのだ。村上さんは終盤、「嘘でも、又聞きでもない日々が重なっ

ていく。これを突き詰めていくと、人生を肯定できるような気がする」と書いた。そのころ、ちょうど村上さんは宮崎入りした。

僕の美術の先生の家にも宿泊され、先生が集めた仲間たちと焼き鳥などを食べられたそうだ。これもまた良い出会い。僕との出会いもそのつながりの中にあるのかもしれない。



高校の部 優秀賞

『死』があるから『生』が輝ける」(重松 清『流星ワゴン』)

1年D組 福原 陸斗

「なぜこんなことしたのだろう。」僕は今までこの言葉を何回使ってきたのだろうか。そして何回「死んじゃってもいいかな」と思っただろうか。

人生は、幾多の選択の連続だ。星々の軌道のように、はじめから何もかも決められているわけではない。また、人生とは線路のようなものだとも思う。生きてゆく中で線路は一本だけではない。いくつもの分岐があると僕は考える。そして、そのいくつもの分岐路を選び続けた末に今の自分がある。もしかすると、あの時違う線路を選び歩いていたら今、この世に自分は存在しなかったかもしれないとさえ思ってしまうほど、人生の線路は実に恐ろしいものである。それでは、この人生の線路の始発駅と終着駅は何だろう。僕は始発駅とは「生まれること」、終着駅は「死ぬこと」であると思う。「生まれること」は希望あふれるイメージがあるが、「死ぬこと」は少し暗いイメージがあるかもしれない。しかし、僕はこの本を読んで「死ぬこと」があるから「生きること」「生まれること」が輝けるのではないだろうかと思った。この世にいられることが永遠でないから悩んだり、苦しんだりしながら人は一生懸命に生きているのではないかと思う。

もちろん、その長い線路には楽しいこともあるだろうが、悲しいことやつらいこともきっとあるはずだ。そんな時、僕の頭に不意に「死にたい」という文字が巡る。しかし、この本に出てくる橋本親子のことを考えたら、自分が実に愚か者であるかが分かった。彼らはまだ生きていたはずだが、事故で命を落としてしまった。一方で自分はどうか。たくさんの人々の支えで生きている自分はほんの少しつらいことがあっただけで「死にたい」と思ってしまう。つまりこれは、自分が自分との闘いから逃げているからそう思ってしまうのだ。また、生きたいと思っていたが自分ではどうすることもできず亡くなっていった人々に何と自分は失礼なことをしていたのかと思った。そして、めんどろなことがあるとすぐに楽な道へ流れくたろうとする自分の愚かさを恥じた。

残念なことに今の技術では時間を遡ることはできない。この本のように過去に残していった後悔をやり直すことはできない。僕には今どうしても会いたい人がいる。そ



の人はもうこの世にはいない。僕はその人との最後の時が今でも夢にでてくる。「あの時もっと話してあげれば良かった。」僕は未だにあのときのその人の手の温もりと感触が頭から離れない。僕の今までの人生で残した最大の後悔だ。後悔は終わらない。しかし、その後悔はいつか何かの時に役に立つ気がするのだ。そう信じたい。

人生の線路には限りがある。終着駅は分かっているが、そこまでの距離や道順は誰にも分からない。まだ十五年程度しか生きていない僕にとって、人生の終着駅は漠然としている。自分がどういう形で終着駅である「死」を迎えるのか考えるだけで怖くなる。しかし怖がっているだけでは何も始まらないのだ。終着駅までの距離が近くても遠くても、今という時間を大切に生きてゆくべきだと思う。どんなに今が苦しく、報われなかったとしてもいつか報われる時が来ることを信じるのが何よりも大切であると思う。

また人生の線路の分岐路は宇宙のように永遠にあると思う。一度しかなく限られた人生なのだから、たくさんのことに挑戦したいし後悔するならば挑戦して後悔したい。この世に生きる者はみんな線路を旅する旅人であると思う。そしてどんな立場の人であろうと人はみんな人生の素人なのだ。

フィジカルは永遠ではない。だからこの世に生きる者達は必死に生きるのだ。この本を読んで、生き物が生まれる不思議、死んでゆく不思議、命の尊さ、生きてゆくこと不思議さと意味を感じた。また、それと同時に自分が今ここにおいて、人と出会いそして、この一瞬一瞬を生きていることは偶然に起きたことではなく、たくさんの出会いと奇跡がもたらしたことだと思った。これからも人との出会いと時間を大切に生きてゆきたい。



高校オープンキャンパスにて

中学の部 最優秀賞

「悩める『マジメ人間』」(村田沙耶香『コンビニ人間』)

3年2組 野村 優花

人は皆、身の回りの人々の話し方や考え方に影響される。仲の良い友達が替われれば、身に着ける洋服も、発する言葉のリズムも変わってしまう。その事実を客観的に見ている主人公の古倉恵子に驚かされた。私はいつも翻弄されてばかりだからだ。

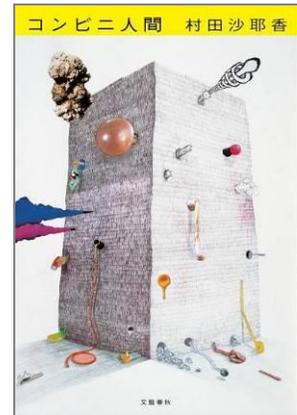
古倉恵子は全てを、コンビニにとって合理的かどうかで判断するコンビニ店員だ。コンビニでの仕事には、完璧なマニュアルがあって、その通りに動くのが一番の正解だ。しかし、コンビニ以外の世界ではそうはいかない。そこで彼女は友人との集まりや他人と話す時などは、同じコンビニで働く若い女性店員の話し方を真似する。着る服は一歳年上のバイトリーダーの持ち物のブランド名をメモし、買いに行く。そんな彼女は、私から見ればむしろ潔い。

私は友人たちとの会話の中で自分だけうまく溶けこめていないような気がする時がある。テンポが一人だけずれているようだし、急にふられた話題で、みんながおもしろいと思う返事が分からないのだ。そんな時私は、少しずつ焦ってしまう。

中学二年生の頃、数人の女子が興奮して跳びはねていた。芸人か、好きな人についての話だったと思う。私はそれほど興味がなかったけれども、みんなの真似をして跳びはねた。自分が着地する音だけ大きく、ドタンと響いていた。

自分もみんなと同じような話し方をして、同じ物を好きになれば、きっと楽しく話せるだろうと思った。みんなの真似をしてうれしい時に「やばい」と言ってみると少し安心できた。会話の中に登場した芸人を、家に帰ってから調べてみた。関連情報をたどって知った事を、次の時にちょっとしゃべって安心した。

ある日、インターネットで「中学生女子・人気の歌」で検索をかけ、出てきた音楽を聴いていて、「私も中学生女子だけど、今私が聴いているのは、私が好きな歌ではない」と思った。友達の話に出てきたことを調べるのはまだ良い。その子がどんなことに興味を持っているのかが分かり、より深く相手を知れるからだ。しかし私はまだしてもいない『女子中学生』との会話に備えて、好きでもない歌を聴いていた。こうやって誰とでも話の合う私が作り出されるとしたら、相手は私自身と話しているとい



えるだろうか。自分の本当に好きなものについては語らず、まとめサイトで得た薄っぺらい知識を、心の浅いところでしゃべるなんて間違っている、小学生の頃はこんな風じゃなかった、と思った。

最近、小学校時代に仲の良かった友人二人と、近所のアーケード街で開催される夏祭に行った。友人二人は同じ中学校に進んでいて、毎日のように顔を合わせているようだが、私は学校が違うので、久しぶりに三人で集まることができるのを楽しみにしていた。私の家で浴衣を着ている間、いろいろなことを話した。何も気にせず、自分の話し方で会話ができた。しかしその時私は、自分のテンポが他の二人と違うことに気付いた。言葉の選び方も、語尾も、なんだか前より雑になっていると感じた。中学校にいる時には気づかなかったけれど、昔の友人といると際立っているように思った。周りになじめない、と思いつつも、少しずつ私を構成するものは変わっていて、もう小学校の頃の自分はそこにはいないのだ。

物語の中で主人公の古倉さんは、大人びて落ち着いた色合いの服を着るようになった妹を見て、「今、妹の周りにはこういう人がたくさんいるのかもしれない」と思う。当然のように書かれたこの文章に、ハッとした。それまでの私の考え方には、二つ間違いがあった。一つ目に、人から自分ばかり影響を受けていると思っていたこと。世界中で自分だけが必死になって影響されているような気持ちになっていたのだ。しかし周りを見れば、この古倉さんの妹のように、みんな多かれ少なかれ誰かに影響を受けている。二つ目に、周りに合わせて自分が変わることを窮屈と思っていたが、悪いことばかりではないということだ。必死に周りに合わせるのではなく、成長という形で受け入れる姿は、私の目にとっても新鮮に映った。

この本を読み、一度コンビニを辞め、再び入ったコンビニの世界で元気を取り戻す古倉さんを見て、気が楽になった。他人からの評価よりも自分がのびのびと生きられることの方が大切だ。その為に少し人の考え方を取り入れる。取り入れすぎで苦しくなっては意味がないのではないか。

これからは自分の心が自由でいられることを優先したい。いつかは誰かに良い影響を与えることができれば素晴らしい。



中学の部 優秀賞

「基本的なことから大切に」（梨木香歩『西の魔女が死んだ』）

3年1組 中間 一希

「魔女になるためにも、いちばん大切なのは、意志の力。自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力です。」

この「西の魔女が死んだ」という梨木香歩さんの本に登場する「西の魔女」こと、主人公まいの祖母は、魔女修行をするというまいにそう言いました。

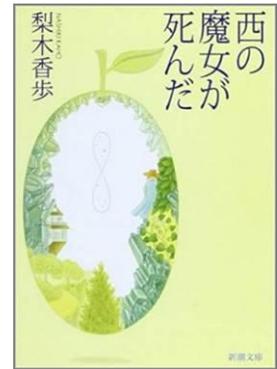
僕は、この言葉は現代の日本に生きる僕たちにも当てはまるのではないかと思います。現代の日本の若者には、「自分で決める力」が強い人は少なくなっているような気がします。もちろん、僕自身、「自分で決める力」はとても弱いと思います。僕は小さい頃から、意見が合わないことで揉める事を恐れて、自分で決断して意見を言うということをあまりしてきませんでした。そのせいで、僕は家でも意見を求められると、「どっちでもいいよ」と言ってしまうことが多く、親からもよく、「もう少し自分で決めるようにしなさい」と怒られていました。自分のように「どっちでもいいよ」という返事をしてしまう人も少なからずいるのではないのでしょうか。僕はずっとそうしていたので、たまに「こうしたい！」という意志があっても口からは「どっちでもいいよ」と出てしまっ後悔してしまうということもありました。しかし、中学校に上がってから、本音を言い合える友人が何人もでき、最近は少しずつ自分が思ったことを口に出して相手に伝えるということが出来るようになってきました。だから僕は、僕を変えてくれた友人たちに本当に感謝しています。まだ少し、相手に遠慮してしまうこともあるので、これからは自分でも意識して「自分で決める力」を養っていきたいと思います。

僕がこの物語を読んで心に残ったことは、もう一つあります。

「人は死んだらどうなるの。」

まいは祖母にそう尋ねました。まいは昔、同じ質問を父親にもしています。そのとき、まいに父親は「死んだらもうなんにもなくなるんだ。」と言いました。僕もたまに「死んだらどうなるのだろう。」と考えてしまうことがあります。そのとき、僕はいつもまいの父親の言葉のような結論を出してしまいます。そう考えると、とても恐くなります。しかし、まいの祖母「西の魔女」はこう答えました。

「死ぬ、ということはずっと身体に縛られていた魂が、身体から離れて自由になる



ことだ。」

僕は、この文を読んで、それまで暗い印象しか持っていなかった「死」を少し前向きに考えることができるようになりました。

さらに、まいの祖母は、まいに『『本当に魂が身体から離れましたよ』と知らせてあげますよ』と話しました。僕は、まいの祖母がどうやってまいにそのことを知らせるのか読んでいる間、ずっと気になっていました。そして物語終盤、まいが学校で祖母が亡くなったと知らされ、母と一緒に祖母の家に来たときでした。昔、まいが祖母の家に来たときに世話をしていた花が咲いていることに気づき、また水をやろうとしてその花の近くに行くと、その奥の汚れたガラスには、指か何かでなぞった跡がありました。

ニシノマジョ カラ ヒガシノマジョ ヘ
オバアチャン ノ タマシイ、ダッシュュツ、
ダイセイコウ

これを見たとき、僕は感動して涙が出そうになりました。「西の魔女」のまいへの愛情や優しさが、この文には詰まっている、と思いました。

この物語で、「西の魔女」が「東の魔女」に説いた魔女になるための修行、「早寝早起き、食事をしっかりとり、よく運動し、規則正しい生活をする。」とても基本的ですが案外できていないことでした。この物語で学んだことを実践すれば、「魔女」にはなれずとも、毎日が充実した気持ちのよいものになることでしょう。これから僕も、毎日を充実したものにするためにも、この物語で学んだことを心がけて生活しようと思います。そうしたら、もしかすると、もっと良い方向に自分を変えていけるかもしれません。



中学の部 優秀賞

「人の心に生き続ける」(湯本香樹実『夏の庭—The Friends』)

1年3組 植村 彩乃

「なぜ、この少年たちは、死んだ人が見たいのだろうか。」

これが私がこの本を読もうと思ったきっかけだった。

私は曾祖父や大おじ等、親せきのお葬式に何回か行ったことがある。しかし、あまり「死」に対して実感はなく、漠然と「怖いもの」というイメージしかない。お葬式に行ったことのない少年たちは私以上に「死」に対して実感がなく「死」について観察したいと思ったのだろう。

この物語は、小学六年生の少年三人が、人が死ぬところを見てみたいと思って、今にも死にそうなおじさんを観察し始めるところから始まる。私はおじさんにばれないかと思いドキドキした。しかし、結局おじさんにばれてしまう。おじさんは、最初こそ怒ったけど、すぐに少年たちを受け入れた。私はおじさんはさみしかったから受け入れたのだろうと思った。なぜなら私だったら観察されるのはいやだし、怒って追いかえずと思うからだ。おじさんは一人ぼっちで話し相手がいなかったから少年たちを受け入れたのではないだろうか。

そこから、おじさんと少年たちの交流が始まる。毎日のようにおじさんの家に行き、おじさんのお手伝いを始める。その交流の中で私が一番心に残った場合はおじさんが戦争の話をしてくれるところだ。おじさんは戦争に行ったことがある。その時、自分が生きのびるためにおなかに子どものいた人を殺してしまった。それが原因で戦争が終わって日本に帰ってきてても、家族のもとには帰らず、自分の幸せを捨てた。おじさんは、「戦争だからね。」という一言しか言っていないけれど、私はおじさんをかわいそうだと思った。なぜなら殺したくなかったのに、自分が生きるために人を殺してしまったから、また、そのことが戦争が終わっても心の傷として残っているからだ。戦争は、おじさんから、家族や幸せ等、いろいろなものをうばったと思う。

私も祖父母から戦争の話を聞いたことがある。祖父母は小学校のころ戦争を体験していて、道を歩いていた時空しゅうにあい、あわてて道の溝に逃げこんだそうだ。また、栄養不足で、生まれたばかりの妹が亡くなったという話も聞いた。食べ物もなく、



勉強もできず、自分の言いたいことも言えない世の中だったそうだ。

また、六年生の時には、修学旅行で「知覧特攻平和会館」に行き、戦争のことを学んだ。特攻の人たちは、二十才くらいで、自分の命を顧みず、敵の船に体当たりし、亡くなっていった。

これらのことから、私は戦争はしてはいけないと思った。戦争は人の命をうばい、人の心を傷つけるからだ。

おじいさんは戦争の時の話を「まるで、袋につめてしまいこんでいたものを、おずおずと見せるように」話した。この様子から私は、おじいさんは、戦争の話を誰かに聞いてもらいたかったのだと思った。

私がこの本で悲しかった場面は二つある。まず一つ目は親しくなってきたおじいさんが亡くなってしまったところだ。サッカーの合宿から帰ってきて、おみやげや合宿であったいろいろなことを話そうとしていた少年たちが、おじいさんの家に行き、おじいさんが死んでいるのを見つける。少年たちが、おじいさんとの思い出を思い出しながら初めて泣いたところだ。

二つ目は、火葬場の煙突を見上げながら泣く場面だ。「おじいさんなら言うだろう。泣くな、と。」と、少年が思った場面からおじいさんの考えも分かるくらい親しくなっていたのだと思った。少年たちはもっとおじいさんと話しがしたかっただろうと思い、私はとても悲しく、涙が出そうになった。

しかし、おじいさんが亡くなった後の少年たちは成長したように感じた。「おじいさんは充分、立派に生きたのだ。おじいさんの白い骨が、ぼくにそう教えてくれている。ほんとうに、めいっばいいきたのだ、と。ぼくもがんばるよ。」という少年の言葉から、少年たちは、一生懸命生きることの大切さをおじいさんから学んだのだと思った。そして、おじいさんは亡くなってしまったけど、少年たちの心の中では生き続けているのだと思った。

私は、この本を読んで、人はいつか死んでしまうけれども、死んだ後も人の心に生き続けることができるということを知った。そのためには、自分が今を一生懸命生きるということが大切だと思った。今自分ができることは、目標にむかって勉強することや自分のやりたいことに真剣に取り組むことだと思う。おじいさんが少年たちの心に生き続けたように、私も人の心に生きられるような生き方をしたい。



<部活動・大会報告>

★高校レスリング部

- ・第44回宮崎県高等学校総合体育大会（5月）
 - 団体 3位
 - 個人 2位 女子 49kg級 井料田朱那
 - 3位 男子 60kg級 仮谷宝
 - 3位 84kg級 飯沼啓将
- ・国体成年の部選手選考会（7月）
 - 優勝 84kg級 飯沼啓将
- ・県高校一年生大会（9月）
 - 優勝 84kg級 飯沼啓将
 - 優勝 125kg級 渡邊荘陽

★高校野球部

- ・第64回宮崎県高校野球選手権大会 ベスト8
- ・第99回全国高等学校野球選手権宮崎大会（7月8日～23日） 準優勝

★高校男子高校バレーボール部

- ・第44回宮崎県高等学校総合体育大会（5月） 3位
- ・第19回宮崎県私立高等学校男女バレーボール選手権大会（6月4日） 優勝
- ・第18回全九州私立高等学校男女バレーボール選手権大会（8月16-19日）
出場
- ・第70回全日本バレーボール高等学校選手権大会宮崎県大会（10/28～11/3）
第3位

～OBの活躍～

◎李 博（筑波大学→東レアローズ） 26歳

全日本男子選手でアジア選手権優勝、ベストブロック賞受賞

◎今村 貴彦（中央大学→パナソニック） 24歳

ユニバーシアード世界大会第3位

※2人とも2020年東京オリンピックを目指しています。応援宜しくお願いします。

★高校陸上部

- ・第44回宮崎県高等学校総合体育大会 第70回陸上競技大会
男子 1500m 決勝進出 田代 敬之 (4'28"38) 13位
- ・第41回宮崎県高等学校陸上競技一年生大会
男子 800m 第2位 田代 敬之 (2'04"00)
男子 やり投げ 第3位 松浦 征那 (34m93)
女子 走高跳 第5位 本島 千愛 (1m35)
- ・平成29年度 宮崎県高校新人体育大会
男子 1500m 決勝進出 田代 敬之 (4'28"08) 10位

★高校硬式テニス部

- ・第44回高校総合体育大会 (5月27日～31日)
男子団体 ベスト4 女子団体 3位
男子シングル ベスト8 (高妻 虎太郎)
女子シングル ベスト8 (矢野 有紗美)
女子ダブルス ベスト8 (谷口・矢野)
- ・宮崎県ジュニアテニストーナメント (8月10日～12日)
男子シングル 2位 (高妻 虎太郎)
女子シングル **優勝** (矢野 有紗美)
- ・第41回 県下高等学校1年生テニス大会 (8月19日～21日)
男子団体 2位
男子シングル 3位 (高妻 虎太郎)
男子ダブルス 2位 (高妻・竹之下)
- ・第49回 宮崎県高等学校総合新人テニス大会 (10月21日～24日)
男子団体 3位 **九州大会出場**
女子団体 Bグループ**優勝**
男子シングル 3位 (高妻 虎太郎)
女子シングル 3位 (矢野 有紗美)



★高校水泳競技

- ・第44回宮崎県高校総体 於：宮崎県総合運動公園水泳場（5/28-29）
松永真彩子（2-A）400m自由形 タイム決勝2位 ⇒九州大会へ出場
100mバタフライ タイム決勝2位 ⇒九州大会へ出場
- ・宮崎県高等学校新人総合体育大会 第53回水泳競技大会（9/2-3）
松永真彩子（2-A）400m自由形 決勝1位 ⇒九州大会へ出場
200m自由形 決勝3位 ⇒九州大会へ出場
愛甲 幹太（2-C）200m個人メドレー 決勝6位

★放送部

- ・第64回NHK杯全国高校放送コンテスト宮崎県予選（6月8日～9日）
アナウンス部門 第3位 根井美映（3A） 全国大会出場
第4位 寺脇麻由（1C）
- ・第39回宮崎県高等学校総合文化祭 放送部門（10月28日～29日）
於 国立オリンピック記念青少年総合センター・NHKホール
アナウンス部門 第3位 寺脇麻由（1C）
朗読部門 第3位 児玉乃映（2B）

★吹奏楽部

- ・第62回宮崎県吹奏楽コンクール 高等学校Aパートの部（7月29日）
金賞受賞 九州大会推薦（日向学院初の快挙！）
- ・第62回九州吹奏楽コンクール 高等学校Aパートの部（8月20日）銀賞
- ・第39回宮崎県高等学校総合文化祭（9月26日）
吹奏楽部門 一般演奏の部 優秀賞
吹奏楽部門 地区合同演奏の部 優秀賞（審査員特別賞）



★合唱部

<中学>

- ・平成29年度宮崎県合唱コンクール（8月12日） 金賞⇒九州大会へ
- ・第84回NHK全国学校音楽コンクール宮崎県大会（8月3日） 銀賞
- ・第72回九州合唱コンクール・中学校の部（9月9日） 銀賞

<高校>

- ・平成29年度宮崎県合唱コンクール（8月12日） 銀賞
- ・第84回NHK全国学校音楽コンクール宮崎県大会（8月4日）
金賞⇒九州大会へ
- ・第84回NHK全国学校音楽コンクール九州ブロックコンクール（8月24日）
高校の部 奨励賞

★美術部

- ・平成29年度宮崎県高等学校美術実技講習・コンクール（7月25日、26日）
 - 高2 鹿野 巧人 優秀賞（立体構成）
 - 高2 入未 里菜 優秀賞（静物デッサン初級）
 - 高1 川田 千夏 優秀賞（デッサン入門）
 - 高1 中村 日向子 優秀賞（デッサン入門）
- ・第35回宮崎県高等学校総合文化祭 美術・書道部門（9月25日）
 - 高3 上田彩世・山本彩華（共同制作）題：「夢幻の街から」
美術部門 奨励賞

★書道部

- ・第39回宮崎県高等学校総合文化祭
(H29.9.25 延岡市：延岡勤労者体育センター)
 - <優秀賞> 2-C 押川 瑞季 <奨励賞> 2-A 小松 暖彩
- ・墨友成績 (H29.11 現在) *学年順、クラス順
 - <一般の部 半紙漢字>

3-A 有馬 佳穂	優級	3-A 藺田 奈央	四段
3-B 鈴木 理子	特級	3-C 山本 優果	初段
3-C 林田香葉子	五段	3-D 浅岡 佳子	四段
3-D 河野 真佑	五段	3-D 山本 彩華	秀級
2-A 小松 暖彩	優級	2-A 福永 桃子	三段
2-B 堤 来 夏	初段	2-C 矢野 由梨	2級
2-C 押川 瑞季	師範	2-D 乗峯あづさ	優級
1-B 久峯 杏華	5級	1-B 久保田夏海	三段
1-B 早田 玲菜	優級	1-C 林田佐和子	準師範
1-D 石川 千夏	2級		

<学生の部>

3-1	大南美由紀	初段上	3-1	高橋 花奈	特級
3-2	大迫 舜理	七段	3-3	山崎菜々子	六段
3-3	吉武由実可	初段	2-1	橋口詩央梨	八段

★中学野球部

- ・第68回宮崎地区中学校総合体育大会 野球競技(6月10日~13日) 第3位

★中学サッカー部

- ・高円宮杯U-15宮崎県中学生サッカーチャレンジリーグ2017
県央リーグ2部A 優勝

★中学硬式テニス部

- ・第23回宮崎県中学生テニス選手権大会(5月7日,8日)
団体戦 男子 日向学院中A 第3位
個人戦 男子 染谷 裕大 第3位
高妻 蘭丸 ベスト 8
- ・第68回宮崎県中学校総合体育大会テニス競技(7月27日,28日)
団体戦 男子 日向学院 第3位
個人戦 男子シングルス 染谷 裕大 ベスト 8
高妻 蘭丸 第3位(九州大会出場)
男子ダブルス 末次・田中 ペア ベスト 16
女子シングルス 矢野 瑞希 ベスト 16
- ・第41回宮崎県中学校秋季体育大会テニス競技(10月28日,30日)
団体戦 男子 日向学院 第3位
女子 日向学院 第3位
個人戦 男子シングルス 高妻 蘭丸 第2位
男子ダブルス 松山・山下ペア 第3位
野中・長谷川ペア ベスト 16
女子シングルス 矢野 瑞希 第3位
女子ダブルス 上山・小嶋ペア ベスト 8

★中学男子バレーボール部

- ・第 68 回 宮崎地区中学校総合体育大会（6 月 10 日～12 日）**優勝**（県大会へ）
- ・第 68 回 宮崎県中学校総合体育大会（7 月 23 日～25 日） 1 回戦敗退
- ・第 41 回 宮崎地区中学校秋季体育大会（9 月 30 日～10 月 2 日）**優勝**（県大会へ）
- ・第 41 回 宮崎県中学校秋季体育大会（11 月 4 日～6 日） ベスト 8

★中学陸上競技部

- ・第 6 8 回宮崎地区夏季中学校総合体育大会陸上競技（6 月 10 日、11 日）
 - 中 1 男子 1500m 川合 悠仁 4'49"08 第 3 位 県大会へ
 - 中 2 女子 800m 竹井 萌 2'37"52 第 7 位 県大会へ
- ・第 4 1 回宮崎地区中学校秋季体育大会陸上競技（9 月 30 日）
 - 中 1 男子 200m 皆川 庸平 28"69 第 8 位 県大会へ
 - 中 1 男子 1500m 川合 悠仁 4'49"03 第 2 位 県大会へ
 - 中 2 女子 200m 下沖 亜望 28"73 第 6 位 県大会へ
 - 中 2 女子 800m 竹井 萌 2'39"07 第 7 位 県大会へ

★その他

- ・第 45 回宮崎県高等学校独唱・独奏コンクール本選
ピアノ部門 : 鉄村杏樹 (3-A) 金賞・グランプリ (3 年連続!)
⇒ 九州大会推薦
- 打楽器部門 : 湯浅駿基 (2-B) 銀賞
- 声楽部門 : 神保彩乃 (3-A) 銀賞



<高校野球部：夏の甲子園宮崎県予選準優勝！>

この夏、日向学院高校野球部は夏の甲子園県予選において準優勝という素晴らしい成績を残しました。37年ぶりとなる甲子園まであと一歩及びみせんでしたが、スタンドにいた在校生・OB・保護者・教職員をはじめ、多くの人の胸を熱くしてくれました。今回は、偉業を成し遂げたチームを代表して宮本修司監督に言葉をいただきました。

第99回全国高等学校野球選手権大会宮崎大会が7月8～23日で開催され、準優勝という結果を収めることが出来ました。

ノーシードで挑んだ今大会。初戦の都城泉ヶ丘を苦しい展開ながら、4対2で逆転勝利したことで波に乗り、2回戦の延岡星雲には10対2の7回コールド勝ち。そして、大会前から大きな山になるであろうと思われていた3回戦。昨年の覇者、第2シードの日南学園に6対5でサヨナラ勝ちし、15年ぶりにベスト8に進出しました。

ここまでの勝ち上がりを振り返ると、それぞれの試合でキープポイントとなる選手がおり、そこでしっかりと結果を残してくれました。「今日は、誰がヒーローになるのか楽しみにしています。」これは準々決勝の前に取材に応えた私のコメントです。普段は、このようなことは話さないのですが、1戦1戦大きく成長していく姿は、非常に遅しく感じて、思わず出てしまった言葉だと思います。

その後も、準々決勝で第7シードの高千穂を10対0の6回コールド勝ち。

準決勝の第3シードの都城商業には6対0の完封勝利と、37年ぶりに決勝の舞台に駒を進めることが出来ました。

新チームとなった時に、選手たちで目標を立てさせます。その目標の中の一つに『最高の笑顔で夏を終える。』これがありました。決勝戦は、聖心ウルスラ学園と対戦し、2対7で残念ながら敗退し、もう一步のところまで、甲子園出場という夢を叶えることは出来ませんでした。試合の直後、皆で涙しました。私も…。しかし、球場を出ると、スタンドで大きく暖かな声援をくれた仲間たちが待っていてくれました。その後、共に励まし合い、最高の仲間たちと『最高の笑顔』で終わることが出来ました。目標達成です。

大会期間中及び大会後も、多くの方から、選手の活躍を受け、「元気・勇気・希望など沢山のモノを貰うことが出来ました。」との、ありがたい言葉を頂戴しました。非常に名誉なことであると同時に、改めて高校野球の魅力・力・可能性を感じるとともに、こうして携われることのありがたさ、そして責任を強く感じております。

ご多忙の中、また炎天下の酷暑の中、球場まで足を運んでいただきました皆様に厚

く御礼申し上げます。

熱く長い夏を過ごした3年生たちも、今はバットをペンに変え猛勉強中です。こちららもご声援お願いします。



宮崎日日新聞の紙面より

< ボランティア・スピリット賞でコミュニティ賞受賞！ >

「ボランティア・スピリット賞」(SOC)とは、ボランティア活動に取り組む12歳から18歳の青少年を支援するプログラムです。この度、全国から寄せられた1229件もの応募の中から、日向学院の2名の生徒がコミュニティ賞を受賞しました。



《コミュニティ賞》

高2 境田 凜

スペイン巡礼路にある宿泊施設で巡礼者のお世話、受付、清掃などを行った。日本の誇る「おもてなし」を世界中の人に提供したいという思いで取り組み、折り鶴や緑茶の提供など日本文化を楽しく伝えることができた。多くの出会いから行動することの大切さを学び、帰国後も東京の外国人向け宿泊施設でボランティアをするなど、活動の幅を広げている。



高2 永友 涼夏

毎週水曜と土曜の放課後に乳児院と老人ホームを訪問している。乳児院では赤ちゃんによって喜ぶ抱き方が違うことを知って工夫し、老人ホームでは困っている人がいないかどうかを確認しながら行動している。高齢者や施設職員からの労いの言葉に励みを感じ、次回の活動日を待ち望むようになった。将来は健康をサポートする保健師を目指している。

<フィリピン姉妹校交流プログラム>

2017年8月10日～15日まで、高校1年生と2年生の希望者を募って「フィリピン姉妹校交流プログラム」が行われました。トンドの職業訓練校の生徒たち、カリタス・ドンボスコ・スクールの生徒や家族とホームステイや授業参加などを通して交流し、楽しみながらも違う見方で自分たちの生活を振り返ることのできた意義深いものとなりました。参加した19名の生徒たち一人ひとりにとって、どのような体験となったのでしょうか。感想文をご紹介します。

「フィリピン姉妹校交流プログラムに参加して」

2年C組 田中美早紀

将来、発展途上国で貧しい人の為に働きたいと漠然と考えていた。高校2年になった今、経済的に豊かではない地域で実際に何が必要とされているのか自分の目で見てみたいと思い、今回のフィリピン研修に参加させてもらった。

楽しみで仕方なかったはずが、不安でいっぱいだった初日、緊張する私にホストマザーは「フィリピン人はみんな家族なの。あなたも家族なのだから緊張しないで。」と、陽気に笑ってくれた。

学校の生徒たちも、学校まで送ってくださったスクールバスの運転手も、トンドというスラム街の子供達も皆な最高の笑顔私たちに向けてくれた。歌とダンスが大好きで明るいフィリピン人にどんどん引き込まれていった。トンドの学校の生徒に町を案内してもらったが、その時に会った大人たちの顔に笑顔は全く見受けられなかった。笑顔どころか、私たちに向けられた、刺すような視線は脳裏に焼き付いている。私たちに寄って来てくれる元気な子供達の輝く瞳も、いつか何とも言い難い覇気のないものになってしまうのかと思うと背筋が凍る。そこで私は、教育や政府による生活基盤の整備も必要だが、当たり前のように茶色く濁った水を飲み、ゴミを漁ることが当たり前になっている現実を目の当たりにして、何よりも公衆衛生を一緒に考えていくことが大切だと考えた。あの時、私たちに笑顔を見せてくれた子供たちにいつまでも陽気で明るい笑顔でいてほしいと心から思った。

その生徒は包み隠さず、聞いているのも耐えられないほどの話もたくさん聞かせてくれた。そんな彼の口癖は“Tomorrow is another day”だった。その言葉が事あるたびにふと思い出される。私に出来る事はなんだろう、と考えさせられる。いつも元気で明るい子供達から大切な事を教えてもらった気がする。

この5泊6日は毎日が充実していて1ヶ月くらいフィリピンにいたような、でも終わってみれば一瞬だったような気がするが、私にとって「楽しかった」だけでは言い

表すことのできない、とても有意義な時間だった。最後になるが、私を家族の一員として受け入れてくれたホストファミリー、明るい笑顔で優しく接してくれたフィリピンの人々、私たちに協力してくださった先生がたや、ガイドさん、畑中さん、そして私がフィリピン研修に参加したいと言った時すぐに後押ししてくれた家族に感謝している。意見を出し合いながら、現地でもたくさん皆で頭を悩ませた事もすごく刺激になった。大学で学んで、また私の大好きなフィリピンに来ようと思う。(ここが私のアナザースカイ フィリピン! 笑)



**Thank you,
Filipino
friends!**



＜卒業生インタビュー＞

後藤 由布子 さん

平成 13 年度卒業生。大阪外国語大学（現大阪大学）ペルシャ語学科に入学。宮崎で公務員として勤務した後、青年海外協力隊として西アフリカのブルキナファソで活動。イギリスのヨーク大学院で戦後復興学修士号を取得し、現在 AAR Japan [難民を助ける会] に勤務。



—ペルシャ語専攻とは珍しいですね。奥が深そうなので、あとでうかがいます。まず日向学院を選んだ理由は何ですか？

後藤：私が小学校の頃は、学級崩壊やいじめが社会問題になっている時期でした。安心できる環境で学びたくて、学院を選びました。学院生の登下校姿が楽しそうでした。

—実際入学して、学院はどうでしたか？

後藤：落ち着いて勉強できる学校でした。私は中学時代、勉強があまり得意ではありませんでした。成績が良くなりたくて、優秀な人たちのやり方をまねするうちに、自分の勉強スタイルができあがり、高1頃から成績が上がりました。英単語コンテスト、国語語彙力テストでは1位に図書券が与えられるので、頑張りました（笑）。中学時代は、書道部に所属していました。中・高いっしょに練習するので、大人の階段をのぼっている感じでした。また、6年間先生・生徒がほぼ同じなので、文化祭や体育祭はとても盛り上がりました。学院ならではの一体感を感じ、大変楽しい学院生活でした。

—では、大学・学科はどのような考えで選んだのですか？

後藤：私は戦争で苦しむ人々を助けたくて、中学時代から外国語大学への進学を考えていました。そんな中、2001年私が高3のときにアメリカでの同時多発テロがおきました。その後アフガニスタンへの攻撃が始まり、連日その争いが報道されるようになりました。私は自分自身がアフガニスタンをよく知らないことに気づき、アフガニスタンの言葉や文化を学んで、戦争で苦しんでいる人に寄り添いたいと思い、大阪外国語大学ペルシャ語科を選びました。

—どのような大学生活を送りましたか？

後藤：ペルシャ語科は1学年20名ほどで、先生と生徒の仲が良かったです。ただ、毎日ペルシャ語の宿題、授業の初めにはテストがあるので、勉強は手が抜けませんでした。さらに語学力を磨くため、イランやカナダへ行き、語学学校にも通いました。そ

の一方で、将来の夢が実現できる仕事は何なのか分からずモヤモヤしていました。

—一度宮崎にもどられたんですね。

後藤：はい。公務員として働きました。楽しかったのですが、もっと世界に視野を広げたい気持ちが大きくなり、海外での仕事を探しました。そんな時出会ったのが、『職業は武装解除』（瀬谷ルミ子著）という本です。この本には、平和構築という活動とそのキャリアの歩み方が書かれてあり、「これが私のやりたい仕事だ」と思いました。

—それでどうされたんですか？

後藤：平和構築の仕事に就くには、途上国での職務経験が必要なので、青年海外協力隊に参加し、世界最貧国の1つブルキナファソに行きました。2年間滞在し、手洗いの大切さを伝えました。そこでは下痢で亡くなる赤ちゃんが多く、貧しくて病院に行けない彼らにとって、一番簡単な予防は手洗いだったからです。

—あちらでの生活は大変だったでしょう。

後藤：毎日が野外キャンプのようでした。水道が屋外なので、水をバケツに張り、家の外で食器を洗ったり洗濯をしたりしていました。当然トイレも外。気温が40℃を超える時もあり、夜寝苦しくて外で寝たこともあります。お腹をこわしたり、泥棒にパソコンやお金を盗まれたりもしました。

—そうした生活によく耐えられましたね。

後藤：初めのうちは、日本に帰りたかったです。でも、半年経った頃から現地の人の温かさが分かり始めました。例えば、3週間ほど家を留守にしていると、「おかえり！見かけなかったけど、どこに行ったの？」と町中の人々が声をかけてくれ、自分が受け入れられていることに気づきました。その頃から現地での生活が楽しくなりました。

—その後、海外はどこへ行かれましたか？

後藤：イギリスの大学院に進学し、修士号を取得しました。また、在学中、十数年前に戦争を経験した、コソボやリベリアに行きました。

—今後の活動を教えてください。

後藤：現在はAAR JapanというNGOの職員として、アフリカのザンビア共和国に滞在し、隣国アンゴラから来た元難民の定住支援を行っています。ザンビア政府は、彼らの間で争いが起こらないよう、土地を与え定住をはかっています。しかし、その場所はまだ快適に生活できる環境ではありません。そこで、私を含め2名の日本人で、井戸や水衛生の面からアンゴラ元難民の定住を支える活動を行っています。



—えっ、たった2名で大丈夫ですか？

後藤：問題ありません。日本人がたくさん行って手取り足取りやってしまうと、日本人の帰国後、現地の人だけでは何もできなくなってしまい、もとの状態にもどってしまいます。主役は彼らで、私たち日本人ではありません。最終的には彼らだけで活動できるように人を育てることが、私の仕事でもあります。ですから、現地の人々を採用して一緒に活動していくので、日本人2名でも大丈夫なんですよ。

—今後の目標は何ですか？

後藤：私がこの夢をかなえるまでに、情報不足で大変時間がかかりました。私の場合、時々東京へ行って情報収集をしていました。夢が叶った今、今度は私がこの仕事に興味がある若者に自分の知識や経験を伝えてあげられればと思っています。

—お体に気をつけて、頑張ってきてください。最後に、在校生と受験を考えている小学生に一言お願いします。

後藤：学院は、自由な校風の中、先生たちが生徒を温かく見守ってくださる学校です。将来の夢を持ちながら、青春時代を楽しんでください。勉強で思い通りの成果が出ず悩むこともあるかもしれませんが、努力したことはすべて将来の自分の糧となります。目標に近づけるように何事も前向きに頑張ってください。応援しています！

外勢 康貴 さん

平成14年度卒業生。気象大学校に入学。卒業後、福島地方気象台、仙台管区気象台を経て、現在気象庁予報部情報通信課に勤務。国連専門機関である世界気象機関での業務にも参加。



—今回は気象庁におうかがいする機会をいただき、ありがとうございます。早速ですが、日向学院を選んだ理由をお願いします。

外勢：県内1の私立中高一貫校で、実際に学校見学に参加して自由な校風が気に入ったからです。男子校の学院が男女共学になって、それがちょうど完成する頃でした。

—学院生活はどうでしたか？

外勢：地元が高城なので、寮に入りました。楽しいことがたくさんあり、貴重な経験になりました。寮は自習時間が決まっていたので、それなりに勉強しました(笑)。数学、物理は得意でしたが、国語が苦手でした。英語は文法をもっと頑張っておけばよかったです。部活動はソフトテニス部、硬式テニス部、サッカー部に入って、いろいろ

なスポーツを楽しむことができました。

—どうして気象大学校を選んだのですか？

外勢：高1までなかなか自分の将来像を描けず、最初はどこかよい大学に入ればいいなあと思っていましたが、親族に気象庁職員がおり、気象庁の仕事と気象大学校の存在を知る機会がありました。その頃から少しずつ興味を持つようになりました。

—航空保安大学校にも合格されていたそうですね。両方ともかなりの難関ですが。

外勢：進学先をどちらにするか大変迷いましたが、幅が広い業務を扱う気象庁の方が私に合っているという周囲からのアドバイスもあって、気象大学校にしました。今の仕事にやりがいを感じているので、自分としては選択はまちがっていなかったと思っています。

—気象大学校のシステムを教えてください。

外勢：1学年約15名、1年生～4年生合計で60名です。1年生は原則寮生活で、先輩との2人部屋です。希望すれば自宅、アパートからの通学もできます。私は3年間寮生活をしました。入学した時点で気象庁の職員扱いになり、給与も支給されます。

1、2年生では、一般の大学と同じように幅広く勉強するとともに、気象の基礎的な部分を学びます。3、4年生で専門分野に分かれ、私は地震学を専攻しました。気象大学校は、気象庁の研修機関でもあるので、卒業後も研修でもどってきて最新の知識・技術を身につけることができます。

—サークル活動などはあるんですか？

外勢：私はサッカー部に所属していました。人数が少ないので、かけもちする人もいます。野球、バンドが伝統的に盛んです。

—卒業後の勤務について教えてください。

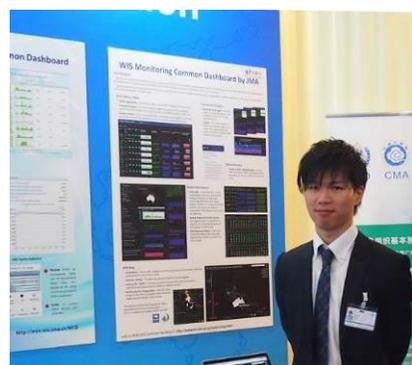
外勢：まず福島地方気象台に2年間勤めました。雲の種類や降水量などの大気現象を記録する観測業務や予報官の補佐などを行い、新たな技術を用いた調査研究などに取り組みました。それから、仙台管区気象台に異動し、3年間勤務しました。そこでは宮城県の天気予報を担当し、東北全域の予報の補佐をしました。実は、2011年3月11日は私が予報担当の日で、予報作業中に東日本大震災が起こったんです。1か月ほど水や電気に不自由する状態が続きましたが、みんなで助け合いながら頑張りました。予測だにしないできごとでしたが、被災者向けの様々な気象情報を適切なタイミングで行政機関や報道機関に伝達し、少しでも被害を減らす気象庁の重要な役割を改めて強く意識させられました。その後、気象庁本庁の予報部情報通信課勤務となり、現在5年間が経ちました。

—本庁ではどのような仕事をされているんですか？

外勢：最初の2年間は、国内の情報通信システムの運用・整備およびデータ交換・配信に関する管理や部内調整をしていました。先ほどお話した、警報・注意報をはじめとする重要な情報を関係機関へ的確に伝達することにかかわる仕事です。そして、ここ3年間は国際的な情報通信業務を受けもっています。外国の気象機関との連絡調整や気象データを交換するシステムづくり、それからこれは福島勤務時代からなのですが、気象データを可視化するなど気象に関する各種ソフトウェアの開発をおこなっています。また、国連の専門機関の1つで、スイスのジュネーブに本部がある世界気象機関の仕事にも携わっており、国際会議に年に2、3回出席しています。

—そちらではどのような内容の仕事？

外勢：世界気象機関は、調和と統一のとれた世界の気象業務の推進に必要な企画・調整活動にあたる機関で、私がかかわる情報通信分野では、気象データ交換のためのネットワーク構築、様々なシステムやデータ形式の仕様の統一を目指しています。それぞれの国の事情によって、気象に対する考え方が違います。例えば、複数の国にまたがる国際河川が流れる



る国では洪水に関する関心が高いですし、火山活動や地震に注目している国もあります。ですから、国際的な統一規格をつくることは、非常に難しい作業なんです。でも、難しいだけに、やりがいもあります。天気には国境はないのですから。これからますます各国が協力して、気象データを活用していくことが重要になっていきます。

—大変なお仕事をされているんですね。では、これからの目標を教えてください。

外勢：気象庁の仕事は、身につけた知識・技術を活かせる仕事です。これからも日々勉強していきたいです。そして、携わっている国際業務を軸として、自分の専門性を磨いていこうと思います。

—最後に、在校生と受験を考えている小学生に一言お願いします。

外勢：今、日々の生活の中で、「己を知り、己に克て」という学院の校訓の意味を実感しています。中学生・高校生で自分の将来像を描くことは難しいと思いますが、その時その時に目の前にある課題に全力で立ち向かっていってください。最初は苦手に思えることでも継続すればできるようになるものです。その過程で、自分の長所や短所がわかってきますし、その課題を克服することによって、新たな自分の世界が広がっていくことでしょう。

(学校紹介パンフレットより転載)

<Photo Gallery>

聖母祭（5月26日）



感謝の集い（6月3日）



高校勉強合宿（5月8～9日）



海の家キャンプ（中1：7月19～23日、中2：7月15日～19日）



高校文化祭（8月31日・9月1日）



高校体育大会（9月2日）



中学校体育祭（9月11日）



中学遠足（10月13日）



若鳩祭（中学校文化祭：11月10日・11日）



慰霊祭（11月18日）



SALESIAN



HYUGA GAKUIN